
一部50円です



本がかもしだす世界

本屋の催しでおもしろい新古本を買った。ある有名な作家が小説家として書いた全ての作品が一冊に集められた電話帳のような厚さの本である。割安感もあって三人の作家分を買った。昔読んだ小説も多いが、改めて読むのもいいかな、と思ったのである。ところが、幾編か読むうちに昔のような感慨がわからないのである。歳を取った為に感性が鈍ってしまったのかと思い直したが、やはり物足りない。

そのシリーズは、一人の作家の全ての作品が年代順に編まれている。文字も大きく振り仮名もあってある。読みやすい。読みやすいのだが、ひとつの小説を読んでも活字がすーと流れるだけで心にひっかからないのだ。情景や心情が浮かんでこないのである。本来、本が与えてくれるワクワクするような想像の世界を感じる事がない。参考書を読んでいるようなのだ。

さて、私は二年前から「芥川だより」に連載された随筆や私記を編集しなおし、和とじ本にまとめて発行している。全てが手作りで市販本とは趣がかなり異なるが、読み出すと、著者の想いが強く伝わってくる。「芥川だより」で毎号読んだときに受けた印象とまた一味も二味も違って、通して読むと作者の考えや想いがふつふつと胸に伝わり、我が身の事のように思えてくるのである。本を持つこの手にひとつの世界を預けられたような、そんな世界観が一冊の本にあるのである。

あの新古本が薄味で物足りなかったのは、ひとつの小説本が持つ世界を読者がより深く広い空間を想像させるための工夫がなされている事を忘れていたからなのだろうか。装丁の問題なのだろうか。そんな疑問を抱えながら「芥川だより」から生まれた和とじ本を手にする。このささやかな本から何かを感じ、この本がかもしだす世界を楽しんでくれる読者が一人でも多くいてくれる事を願う。そして、このような本が生まれたことを素直に喜び、個々の書き手である人達との出会いに感謝する次第である。

★現在「芥川だより」の連載をまとめた和とじ本は、『夜道』『瀬戸内に踊る魚たち』『母の「今は昔、昔は今」』『その足跡を』『仏と共に』『百日紅』の6冊です。



九十四歳の姑さんを見送ったSさんの話は納得させられる。結婚以来三十五年間同居してきた姑さんは、しっかりした賢い人だったので教えてもらうことも多かったが、確執も深かった。

実家に帰る時にも「あなたが里帰り出来るのも、私が元氣だからですよ」と念を押されて、実家に長居をすることは出来ず、二時間程でトンボ帰りをしたと。姑はボケることもなく、テレビの日曜討論を見ることを楽しみにしていて、分からない言葉をメモして孫に説明を受けていた。そんな姑は、ガンを告知され死後の事を準備万端し二ヶ月間入院して亡くなった。

「亡くなる前日、息子である夫と娘である義妹と私が病室にいて、二人がベットから離れ私が姑の足をさすっていた時、姑が私の顔をみて私だけに聞こえるような小さな声で『あなたには本当に世話になったわね。ありがとう』と言ったのです。私は、その言葉を聞いて、これまで心の奥にあったわだかまりが昇華するように消えていくのを感じた」と穏やかに言われる。

同じような話を聞いた事がある。その人は二十歳で嫁ぎ、舅の世話をずーとしてきた最期の時、舅が「世話になったなあ、ありがとう」と言ってくれた、と。最期の一言が人の心を救うのである。

《ヒマラヤへの道 16》

ガルムツシユ峰 8

梵店主

休養日の翌日、由べえが体調が悪く、山猿と交代する事になった。よっちゃんらが行き詰った岩峰に隊長と山猿がルートを探すべく登っていった。

よっちゃんと由べえは荷揚げする。荷揚げするロープは9ミリのクレモナで80ギ単位に切つてあるので2セット担ぐと結構重い。やばいルートが続くのでロープは出来るだけ多く欲しいから荷揚げは大事な作業なのである。

よっちゃん達が5700ギにあるテントまで登り、紅茶を沸かして休んでいると、工作隊が意気揚々と下つて来た。いいルートが見つかったようだ。岩峰を登らずルンゼに降りてトラバースしてルンゼを登るルートだ。

「落石の巢みたいなルートだから必ず上を見て落石の方向を見定めて避けながら素早く登らないと事故を起こす」と山猿は言う。

「標高差で100ギ位かな、登りきった所が今日の最終到達点だ。あとは頼むよ」と言つて隊長たちは下つていった。よっちゃんは岩壁を登らなくていいのだと思うと一安心した。

落石の巢だというルンゼはよっちゃんも見ていた。岩峰がそり立つ間に切れ落ちるような崖のようなルンゼである。とても登れるようなところではない。どんなルートを作ったのか？

明日登れば分かるが、よっちゃんは自分のはたして無事に登れるだろうか。不安が脳裏を過ぎつて落ち着かない。

今回の登山が成功するか失敗するかここ数日で決まる。遠征計画がひとつの大きなドラマであつて、クライマックスが近づいているのである。よっちゃんは、不安を打ち消すかのようにこれまで登山を振り返つて考える。

どんな山登りにもドラマがある。登頂あるいは完登するというクライマックスと裏腹に、一歩間違えば墜死したという恐怖、一瞬の気の緩みをもたらす滑落、そういう不安、恐怖によっちゃんはさいなまれていた。下山した後で「あの時、もしかしたら……」と想像すると、背筋が凍るほど怖くなるのである。

よっちゃんが入部する半年前に、「もしかしたら」が現実となった遭難事故があつた。それを目の当たりにしたのは、その後よっちゃんと何度も山行を共にすることになるM蔵だ。M蔵は、この遭難をめぐるさまざまな柄や思ひについて記していた。よっちゃんはM蔵の手記を思い出していた。

《M蔵ノート》より

その年の5月合宿は、穂高と決定し、西穂から縦走するパーティーと北鎌尾根を登攀するパーティーの2隊を編成して、洞沢で合流するという計画を立てた。

北鎌尾根パーティーは、OBの石、5回生の忠、4回生がリーダー松、そして2回生が、ブチとオレの2名、5名で構成された。

入山後2日は、大きな困難もなく5・6のコールにキャンプを張る。

オレは、任されたルート工作を慎重にこなし、北鎌尾根にルートを着実に拓いていった。

核心部の独標の登りは、夏ならばさほどむずかしくない難易度3級程度の凹角の登りであるが、今は雪深い春、そのうえ40キロを超えるキスリングを背負った体勢での登攀は、難度が大幅に増し、体力は消耗する。

凹角の壁を登りきる瞬間、オレは浮石を掴み、落下した。3ギ下のテラスにたたきつけられたが、またまたテラスには雪溜りがあり、奇跡的に無傷であつた。3日目は北鎌平にテントを張る。

4日目も、トップでルートを切り拓き、槍ヶ岳の頂上に達する。その日は、南岳小屋横がキャンプサイト。

悪天のため2日間の沈殿。

ここから合宿最後の核心部、大キレットが大きな口を開けて待っている。飲み込まれたら、生き残るすべはない。5回生の忠さんと二人で、一本のザイルで互いを結びあつてルート工作を行うコンテニユアスで先行した。

南岳ピークをすぎ、大キレットにさしかかる。長谷川ピークを過ぎ、滝谷へ切れ落ちる雪壁の前に到達。後続パーティーとの間隔があいたことから時間待ち。その時間を利用して、雪壁にフィックスロープを張ることにする。フィックスを張り終え、ザックを下ろし一服する。

なかなか、後続パーティーが到着せず、忠さんがアイゼンワークの講習を行なうという。ノーザイルで雪壁の登降、トラバース等を行なつた。今思えば、何故フィックスロープを張るような危険な雪壁を利用して、アイゼンワークの講習を行なうといひだしたのか理解できない。あのときの忠さんは、危険にたいする感覚が麻痺していたのだろうか、それとも自分の登攀技術に過信があつたのだろうか。

忠さんは、ダンスをするようにステップを踏み、軽快なアイゼンワークを見せていたが、突然アイゼンの爪が滑った。何度もピッケルのピッケルを雪面に打ち込んで制動をかけようとするが、雪面が固く刺さらず滝谷へと滑落していった。このときオレは、何が起つたのかすぐには飲み込めず、茫然自失の状態であつた。

そのうち後続パーティーが到着。事情を聞いたOBの石さんは、すぐにオレにザイル確保を命じ、滝谷に続く雪壁の下降を開始した。しばらくして石さんは戻ってきた。

「滑落の痕跡はあるが、本人は見当たらない。おそらく500メートル以上落下しているだろう」とのこと。

オレは恐怖と後悔で涙が止まらず、石さんに「お前も死にたいのか。気をしっかりもたんと、2次遭難を起こすぞ」と怒鳴りつけられ、正気を取り戻した。

搜索は、滝谷下部からアプローチする以外に方法はない。早急に下山することにする。

搜索隊は蒲田側の中崎山荘に本部を設置し、本格的な搜索を開始した。

オレは、アドバンススペースの滝谷避難小屋へのボツカに明け暮れた。

滑落してから3日目に、遺体となった忠さんが発見された。

忠さんは、2年前に行われたビッグイベント、ダウラギリ1峰登山に最年少隊員として参加し、8000を超え高山所最終ルート作業をしたほどの優秀なクライマーであった。

もつとも期待された若手ホープであった忠さんが遭難死して、山岳部は解体寸前となった。2回生は、次々と退部して、気が付くとオレ一人。それまでも、すべての山行に参加していた2回生は

オレだけであった。山岳部廃部という苦境から逃げようなどとはけつして思わなかった。

そんなことは自慢にも何もならないが、要するにオレは仲間がいなくても平気なのだ。人に合わせることは苦手だし、自分のやりたい山登りができればそれでよかった。

かといって、器用な振る舞いなんてできない。むしろ目先の利かない不器用な人間であり、そのうえ楽観的にできている。……

あのとときの忠さんの不可解な行動は、いまだに謎である。あの情景ははつきり目に焼きついて、今も色あせることはないが、いとも簡単に死線を越えてしまったように思える忠さんの、あの振る舞いはどこからきたのだろうか。その先は深い霧に包まれて見えない。

山登りには、天気など不確定な要素が多く、事前の予想と違う事が起きる。危険な所は精神的にも緊張し、準備に怠りないためか、意外にも問題なく通過できるのだが、思いもよらなかったところで、事が起きるのである。

山の難しさが隊員の疲労を蓄積させ、些細な事に気を荒たしてストレスのマグマが溜まってきていたのだが、よっちゃん、まだその事に気づいていなかった。

私は十六年前に阪神淡路大震災で被災した。一月十七日の未明、私は布団の中でまどろんでいた。目覚まし時計を止めたあと

「そろそろ起きなきゃな」と自分言いかせていた。東京へ出張しなければならなかったからだ。

その時だった。ドーンという音と共に地底に引き込まれる様な衝撃を受けた。一瞬、

「どこまで落ちるんだ」との恐怖に襲われた。次いで体を突き上げられ、激しく左右に振られた。

「地震だ！」

妻を揺り起こした。次いで子供部屋に行こうとした。

しかし、腰が抜けたような感じで歩けなかった。中腰でよろけながら、どうにか息子と娘を見に行つた。

震源地は日本海だと報じていた。

しかしその後、淡路島北部に訂正した。何と明石海峡を挟んで、私の自宅の向かいだった。

「こりゃ揺れるはずだ」

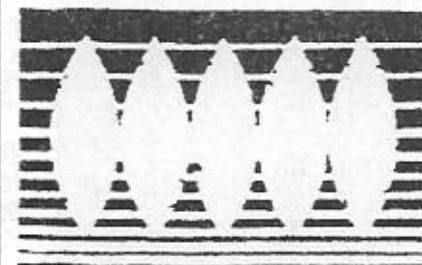
余震が少し収まったので、外へ出てみた。瓦は落ち、壁は剥がれ、床にひびが入っていた。後で分かったことだが、ガス管も水道管も床下で切れていた。どうやら家の土台が一瞬、宙に浮いて地面と離れたようだ。

それは数カ月後にはつきりした。少し強い風が吹くと家が揺れるようになったのだ。

『大きい台風が来て家族が家の下敷きにでもなれば取り返しがつかない。建て替えなきゃならんなあ』

と思った。しかし、家のローンと教育費に追われ金がない。やむを得ず息子と娘の大学卒業を待つてから家を建て替えることにした。

それから七年後、耐震性に優れた丈夫な家に建て替えた。震災で『家は命を守る囲い』との思いを強くしたからだ。しかし四十五歳にして再び住宅ローンを抱え込んでしまった。三千五百万円。重荷だった。《龍》



前号で義兄はピンピンしていると書いたが、年末年始の間に少し状況が変わって来てしまった。義兄が「何だか、胸のあたりにガンが広がって来ている感じがする」とか言いだし、実際、変な咳も出ているらしい。

この年末・年始にかけて義兄と姉は大分に行っていた。そこで寒波に合い、以来、調子が悪いようなのだ。

大阪からはるばる大分に何をしに行ったかという「湯治」である。何でも、NHKの番組で、大分の湯治場を取り上げていて、それを見た姉が「行こか？ここにいったら、あの子ら（息子夫婦のことである）が泊まりに来て、忙しいだけやん。ゆっくり療養できるんちゃう？」と義兄に言い、会社をずっと休んでいて、ヒマな義兄は「それもいいかも」とパソコンで調べて、早速、申し込んだのだ。義兄はよっぽど気が乗らないこと以外、たいがい、姉の言う通りにしている。

湯治場だから、正月料金でも一泊4千500円。行く前に、姉は私にこう言っていた。「そこは、自分で食べたい野菜を温泉の熱で蒸して食べられるようになってんねんテ」。食養生で義兄のガンを治そうと、やつきになっている姉は、

タジン鍋とやらを買い込んで、義兄に温野菜を食べさせようとしていたが、

「あんまり、うまいこといけへんねん。あつちでちよつと研究してくるわ」。

義兄が一日3回飲んでいる「ニンジンジュース」を休むわけにはいかない。車で、車にジュースのほかにニンジン、リンゴ、レモンなども積み込んで行く。フェリーを使って、運転する義兄の負担を軽くし、1週間ほど温泉三昧していれば、きっと体に良いはず、と姉は考えたのだ。

しかし、それは甘かった。まず、この冬の異常な寒さが、わざわいした。あろうことか、九州にも雪が降り、たまたま私が姉の携帯に電話したとき、「大変なことになってんねん！いま、おまわりさんに止められて、チェインを巻きなさいと言われてん。外は、すごい吹雪やねん」と緊迫した雰囲気。仕事は夫任せで生きてきた姉に、チェインを巻くなんてことはできないから、ガン療養中の義兄が雪の中、チェインを巻いているようだった。あわてて切った。

次にかけたときは、旅の二日目か三日目で、またまた姉は車の中にいるようだった。「シャワーもないようなところで、気持ち悪いから、ほかの温泉に入りに行くことにしてん」と何やら、

アテが外れている様子。寒さも想定外のように、「夜、寝られへんぐらい寒いねん」と怒っていた。

何だかなあ、である。しかも、姉は「携帯の充電器、持って来るのん忘れてんやんか。いま、ギリギリ話せてるけど、もうムリと思う」と言うではないか。じゃ、何かあったら、義兄さんの携帯にかけると、と言いかけたら、「あれはもう、つぶれてしもた」だと！姉と私の母は84歳だ。第一家は、嫁のお父さんのおごりで、今年はお正月4日間、グアムに行っている。母が万一、お餅をノドに詰まらせたしたりしたら、どうやって姉に連絡するんだ。そう思うと、ハラが立ったが、姉の方もいろいろ思感が外れて、大変そうなので、とにかくあわてて電話を切った。急なときのために、姉の携帯の余力を残さなければ。

姉は、義兄がガンになってからというもの、義兄と自分のことで、とにかく「いっばいっばい」になってしまった。人生の最優先課題がニンジンジュース。息子も孫も（嫁はもとより）邪魔つけな存在にうつるようで、母の話し相手になる時間など、まるでない。

あるとき、母が不満そうに「あの子、おかしい。一体、何をして、毎日あんなに忙しがってんねんやろ」と言ったことがあったが、私は自分は姉の悪口を言っても、ほかの誰かに言われるとハラが

立つという屈折した心理で、意地悪く、母に「そら、自分の旦那さんが生きるか死ぬかの瀬戸際においたら、ほかのことは考えてられへんのんちやう？」と言ってしまった。あとになって、「あんなこと言わなくても、『そうやねえ』と言っておけばよかった」と後悔するのだが、後悔は常に先には立ってくれない。

しかし、私も不満である。せめて、携帯電話の充電器ぐらい持って行け！そして、老いた母がいるのだ。泊まる宿の連絡先ぐらい、教えて行け、というのだ。1週間、音信不通になっていて、母に何かあったら、お葬式まですつかり終わってしまう。しかも、姉たちは母には12月30日から行くと、挨拶に来たらしいが、母が勘違いして、1月1日からだと思込んでしまい、私にもそう言ったので、30日に何度、家に電話しても出ないから（お節料理を取りにおいで、という用件で）、母はすつかり腹を立てていた。そこへいくと、弟夫婦はぬかりがない。

前日に母のところに来て「明日は朝早いので、挨拶せずに行く」と言い、



「日めくりカレンダー」

明石 幸次郎

「次の日、関西空港から子どもたちが元気いっぱいので電話してきた。「ばあちゃん、これから行って来る！」。そして、グアムで使えるようにレンタルした携帯電話の電話番号も弟が伝えてきた。」

それに引きかえ、姉たちの大分湯治計画はぬかりだらけだった。予定を2日早めて帰ってきてしまつて、言うには「ちゃんとした脱衣所もないようなところや。台所も、寒うて」部屋から温泉まで、旅館やホテルなら館内の廊下を行くが、湯治場だから、外の山道みたいなどころを少し歩くらしくて、「寒いであ。すべりそうで、恐いし」。それに、着いた日に部屋でジュースを回したら、その音に旅館の人がびっくりして飛んできたそう。『何してらんですか？』って血相変えて、来はってん」。姉たち夫婦が、少し早めに帰ってくれて、湯治場の人たちもほつとしたのではないだろうか。

寒さのせいだったのか、義兄は、大分ですつと咳をしていたという。それでも、「車で行つてたから、湯布院も行ったし、別府のほかの温泉もまわつてきたから、ほら、肌スベスベになつてきたやろ」と姉が自分のほつぺたを「さわつてみ！」と向けてきた。確かに、しつとりスベスベになつていたが、姉よ、それでいいのか。(A O)

つい先頃、正月を迎えたかと思つたら、もう大寒も過ぎて、ぼちぼち立春を迎えようとしています。日の経つのは早いもので、世の中が慌しいのか、自分が義務的なことで時間に追われ、その生活に流されてしまつていくのか。この数年は日々の変化する季節を感じ、草花を愛でることの無いまま時が過ぎ、気がつけば還暦を迎えてしましました。

毎日見ている、会社が客先に配つた今年のカレンダーなどは、誰が言い出したか知りませんが、科学的に根拠のない迷信は差別に繋がると言つたことで、日付けに載せていた暦の先勝、大安、仏滅といった六曜が全て除かれ、曜日と日にちを知らせる数字だけのものになつていきます。一部上場の企業が出しているカレンダーは、CRS（企業の社会的責任）の観点から差別に繋がる六曜の記載はしていないものが、かなり前から、殆どとなつていくようです。

会社は独自で六曜、旧暦、十二支などを日にちの横に載せたカレンダーを作つて農家に配りました。我々の年代から上の世代は、どうもカレンダーというものは、日にちと曜日だけを知るだけでは何か物足らなく、今日は何の日かを確認したくなります。家にはありませんが、会社には一番目立つ場所にB4サイズの日めくりのカレンダーが毎年掲げてあり、朝出勤すると同時に、前日のをめぐり、それを捨てて、当日の日めくりを見て、「今日は何の日か」を確認するのが習慣となつていきます。

えのない一日であることを知らせているように感じます。日付けと曜日を知らせるカレンダーとは、このような「日めくりカレンダー」とは、伝達機能が違ふのは当然ですが、日めくりカレンダーがどこの家庭にもあつた昭和三十年代頃を境として、日本社会が都市化と工業化に大きく変動すると共に、日めくりカレンダーは、農村を除く一般家庭からカレンダーとしての役割を終えて、今や極少数派に甘んじています。

今、勤めている会社は農家相手の販売会社ですので、親会社から有償で割り当てられる日付けだけのカレンダーは、農家からは大変評判が悪く、急遽、

因みにこの原稿を書いている一月二十四日の日めくりには、日付け二十四日を真ん中に左に月曜日(MON)旧暦十二月二十一日友引、う(十二支)七赤、つちのと、中潮と書かれ、右側には初地蔵、東京栗鴨とげぬき地蔵大祭、一粒万倍日。中段(十二直)満(みつ)神祭り、家造り、移転、婚礼、開店、種まき土を動かす等よし。更には、二十四日の下には二十八宿(張(ちよう)婚礼、神仏の折り、又は奉公(就職)に吉。種まきに大利あり。その下には、明るい性格は財産よりも尊い”

この日めくりカレンダーの衰退と共に我々日本人が自然とのふれあいを失い、神仏への祈り、季節の行事の衰退と、季節感を日々感じる精神的余裕を失つてしまひ、更には日々の意味合いも感じる機会を失つてしまつたのではないのでしょうか。テンコ盛りの日めくりカレンダーの価値を再認識することで、自分が失つてしまつた日本人の自然観から来る精神的価値を見直す、取り戻そう、と思つた次第です。

今、勤めている会社は農家相手の販売会社ですので、親会社から有償で割り当てられる日付けだけのカレンダーは、農家からは大変評判が悪く、急遽、

(カーネギー、1839~1919年、アメリカの実業家)と言つた教訓までが書かれ、この二十四日という日は、今日しかない(当たり前のこと)、掛替

今日しかない(当たり前のこと)、掛替



子守唄

具志 清

拝啓 ご多忙のところへ続け様に御免下さいませ。昨日お送りしたばかりですのに、中途半端な終わり方になったようで、気になりました。それで重ねて書かせて頂きたいのです。

実の母が戸籍上では姉であることが、外には無いでしょう。こんな奇妙奇天烈な事を平気で人様に語るのは、ほんとに恥知らずとは思いますが、母とわたしは置かれた当時の事情を、誰かに少しでも理解して頂けないだろうか、とずっと考えていました。

高井様こそ、いい御迷惑ですわね。でも、どうか御慈悲下さいませ。

貧農という言葉がありますが、母の里は正にその典型でした。山奥の十戸ばかりの小作農家の中でも最も貧しい家でした。峠を一つ越して村の中心まで行かないと田畑と小川の外になんにもありませんでした。母は村の小学校を出ると京都へ奉公に出されました。最初は西陣の織物屋の女中奉公です。それから幾度も働き場所を変え、最後はあのカフェです。カフェといっても戦争末期は雑炊などを供する食べ物屋になったそうです。山奥から出てきて苦勞を重ねた母は、ここで父と出会い、こころが救われたの

です。

父を送った後、直ぐに帰郷した母は、両親に全てを話しました。小さな集落ですから、事情はすぐに知れ渡りました。貧しさの中にも、心やさしい人々ばかりでした。祖父母が親しくしていた隣家は集落の班長さんでした。祖父が村役場へわたしの出生届に行く時はその人も付いて行ってくれました。

前にも書きましたが、母は戦後無しに東京へ行きました。京都ではなく東京にしたのは、父が生まれ育った街に住みたかったのです。場末の飲み屋の住み込み女給を手始めに、様々な職を転々としました。里へ仕送りを続けながら、時々わたしに会いに来てくれました。そんな生活がわたしの就学年齢まで続きました。

わたしが小学校へ入る時、帰郷した母は、姉として付き添って行きました。学校は本当の事は知っていたようですが、そつとしておいてくれたそうです。母は私が一年生の間は里で暮らしました。

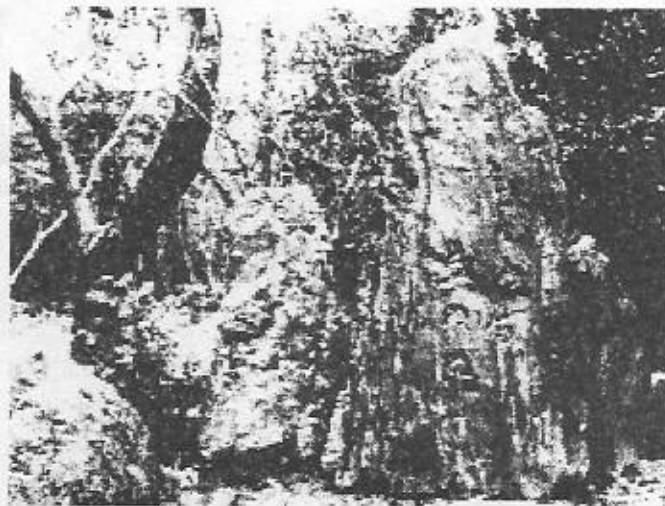
村の学校へは峠を越して、子供の足で一時間はかかりました。集落の十二、三人の児童がまとまって登校しましたが、帰りはまちまちでした。母は早朝から村の素封家へ賃仕事に行っていました。時には仕事が早く終わると学校へ寄り、わたしを迎えにきました。

そんな日、母子二人で山道を歩きながら歌ったのは、第三高等学校寮歌でした。父は高等学校も京都を選びました。「紅萌ゆる岡の花」と母が歌うと、わたしは、「くれないもゆるおかのはな」と追います。続いて、「早緑匂う岸の色」と母、「さみどりにおうきしのいろ」とわたしは繰り返します。こんな調子で一節終ると、今度は初めから二人で合唱です。二番、三番と、わたしは意味は殆ど分らないまま母の真似をして歌いました。手を大きく振って、兵隊さんの行進のように歩くのです。あの調べはそんな歩調によく合いました。母と子は時どき笑顔を向け合い、首を振り振り歩きました。

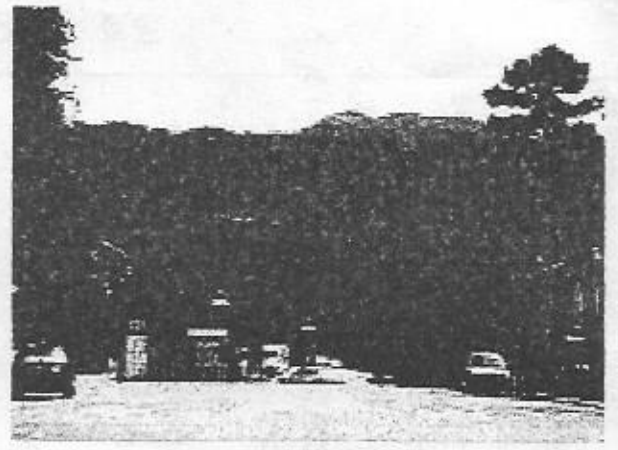
した。他の子供たちと一緒にの時もありました。みんなも口まねで歌い、楽しい帰り道でした。幼い頃、母がわたしを背負い、または胸に抱いてよく「紅萌ゆる」を歌いました。三高寮歌は母がわたしの為に歌ってくれた子守唄でした。

あの日、名曲喫茶のあと電車で百万遍へ行きました。京大の北門から構内に入り、ぶらぶらしました。時計塔を仰ぎ見て、正門を出ました。正門の向かいの学舎がむかしの三高です。東へ歩くと直ぐ吉田山です。登る前に吉田神社へお参りしました。山というよりは岡ですね。山頂に「紅萌ゆる岡の花」の碑が建っており、木立の向こうに時計塔が見下ろせました。

わたしの最初の京都の二日は吉田山で終わりましたが、父と母のおもかげを求めて行きたい所はもつとあります。この次は比叡山へ登りたいです。市中からもよく見えますね。ゆるやかな峰が降りてきて京の街をやさしく抱えております。比叡山へは、母と父と二人の時だけでなく、父のお友達二、三人と一緒に登ったこともあり、そんな日には、母はみんなの弁当を作りました。自分の下宿の炊事場でおにぎり結びながらも楽しい気分になったそうです。へ



「紅萌ゆる岡の花」の碑



吉田神社

たらよいのか、小生には適切な言葉が
りあません。御容赦下さい。

お母様と二人でふるさとの山道を

「紅萌ゆる岡の花」を歌いながら大手
を振って歩いている情景が、目に浮か
ぶようです。なんとも微笑ましい母と
子の姿ではありませんか。幸せな時間
でしたね。そうですか、お父様は第三
高等学校でしたか。小生達の世代は少
年の頃、いわゆるナンバースクールは
憧れの学校でした。もっとも戦後の学
制改革で全ての高等学校は新制大学と
なり、当時中等学校一、二年生の小生
達はがっかりしたものです。

この秀嶺に祖国の平安を祈願し、京
都の学生さん達は戦地へ向かったの
でしょうか。
「またも長々と書いて参りました。ご
免下さいませ。」
かしこ

謹啓 七月に入り暑さも愈々厳しく
なりますが、御元気の事と存じます。
貴女の御書簡には心が動かされま
す。小生のような凡々たる人間に深淵
な御心情を吐露して頂き、恐縮致して
おります。

「私の母は、母そして姉なのです」と
いう言葉の重さに、お母様とお二人で
懸命に生きてこられた歳月を思い、小
生は胸が詰まります。大変だったでし
ょう。と平凡な挨拶では、なんの慰労
にもなりません。では、どう申し上げ



高野川から望む比叡山

吉田山へは小生も、もう何遍も登り
ました。京大は取引先でもあります
し、あの構内はわが家の庭のように跋
扞しております。唯、面目無い事を告
白しますが、小生、身の程知らずにも、
あの大学を受験し、あっさりとはすべ
てしまいました。結局、関東の私大で
四年間過ごし、関西へ戻ってきた次第
です。小生を撥ね付けたあの大学へ
は、ウラミコツズイです。高価な書籍
を売り込むことで、ウサバラシをして
いるのであります。いや、これは品の
無い冗談を言ってしまった。あの
大学様には毎度お世話になっており
ます。感謝しなければいけません。

丸善とみゅーずへ入られたのです
ね。嵐山以来、行かれる所が小生の縄

張り、いや、これまた、不遜な言い方
ですが、つまり屢々行く所ばかりなの
で、びつくりと同時に嬉しくもなりま
す。

「檸檬」は小生も読みました。(私)
が檸檬を買った果物屋は今も寺町二
条にありますよ。梶井基次郎は三高時
代その近くに下宿していたようです。

丸善は近年、木造から鉄筋へ改築され
ましたので「檸檬」の時代の雰囲気は
無いでしょう。みゅーずは、仕事の合
間に、或いは退勤時、利用しておりま
す。この次は比叡山へ登りたい、との
ことですが、比叡山延暦寺も小生の得
意先です。呢懇の僧籍の方も幾人かお
ります。是非お知らせ願います。御案
内させて頂きます。

お母様にとつては、比叡山もお父様

との思い出が深く、懐かしく語ってお
られたでしょう。比叡の山路を三高寮
歌をお二人で静かに歌いながら歩いて
おられた、と思います。あの敗戦後の
東京の混沌とした焼け跡の街で必死に
生きて来られたお母様は、日々の暮ら
しの中で、比叡の山並みへ想いを馳せ
た時もあった、と思います。
貴女が日々を快活に暮らして行く事
は、戦中戦後の辛苦を克服し、その生
を全うされたお母様への報恩ともなる
でしょう。
本日はこれにて擱筆させて頂きま
す。
敬白

俳句

土田 裕

- 手を温め言葉温めて余寒なほ
- 下萌えや土の疲れを癒すこと
- 春寒の碧天に聞く鶯の笛
- 如月の絵馬幾重にも天満宮
- 梅が香を待ちて一服茶屋床机



思い出にひたる

蠟を染み込ませた原紙に鉄筆で文字をつづる時、「書く」と言わず、ガリ版を「切る」という。字のうまい人は、ガリ版を「切って」「する」という仕事についた。

小学校の時、先生が、ガリ版を「切って」「すって」連絡票をつくった。私たちはすり上がったものを封筒に入れてゆく。

封筒も手づくり、表紙の宛名書きは毛筆。

子使い走りが出て、手際よく封筒を各村へ配布してゆく。後は、のんびりピンポンをして遊んでいたわ。

「わしの仕事は終わったんや」

今はもう「切る」ではなく、もはや「書く」でさえなく、文書は、キ―で「打つ」となった。

私が、今書き残したいと思う事は、「老人文章」とかけ口をたたかれる。それでも書く。

その人が、過ぎてゆく時代に、奏でた挽歌のように思われていいではないか。

思い出文集は、もうすでに黄色く変色し紙も破れて危なっかしい。クラスの皆さんの一字一句が刻まれて、今は亡き友達の面影を追う、老いた自分である。

ホットライン

人生には、ストレスはつきもの。でもホットラインを持つている人は、それ程落ち込まなくてすむし、また立ち直りも早い。

ホットラインとは、相手の顔を見ただけで、ホッとする人、声を聞いただけで、ホッとする人。

これは二人が必要、ひとりだけだったら、いつだって、その人がいてくれるとは限らない。

ホットラインは、年上でも、年下でも、異性でも、同姓でもいい。配偶者でないほうがよい。電話で「声が聞けただけでも、ホッとしました」という人がよくある。

自分ひとりが、つらいことになった人生だと、よく口に出し、出るけれど、此の頃、やっと。

誰だって同じだと早く開き直ること。と私が言えるようになったのは、人生の穂先が見えてきたから、強く言えるのかも知れない。

じっくり向き合う必要があるのか

いくつもの仮面を使い分ける人の面の皮は厚く止まることを知らない。

「これが当然なのだ。世間の常識なのだ」

と言う。この言葉は、私は好きではない。私には線引きが出来ないから。

静かに私の周辺を見渡してみようけれど、何故か雲つて見え、晴れ間が出てこない。

その心の中では、時には紅く、青くゆらめいて、私の気持ちをゆさぶりつづけるのです。

他者に不快を感じさせることのない態度をとる。基準となる考え方、誰か教えてくれませんか。希望や目標を失う前に、もう一度じっくり、人生の楽園の夢をみたいのです。

編集後記

年末年始は豪雪で困られた方も多いと思います。神戸の先輩が年末「爺捨て山に行ったら食えんやろから、ふぐを食わしたる」とありがたのお誘いを受け、初めてふぐのコースを御馳走になった。ひれ酒を飲みながら、てっさや大きな肝を頂き、ふぐ料理をこれまで食べなかった事が悔やまれるほど美味かった。「芥川だより」を続けて、今年も是非御馳走になりたい。
訂正■「京鹿子幻影 5」で誤字がありました。4ページ3段目後から5行目の名園は「名庭」、5ページ1段の後から1行目の適性は「敵性」に訂正します。

*お知らせ

2月13日(日) 十二時から

芥川商店街に隣接する「芥川商協会館」で、芥川だよりの初の懇親会を行います。これまでの芥川だよりを話題に楽しい時間を過ごしたいと計画しております。お気軽にご参加ください。当日、当店へお越し下さい。(蓋)

『人気のデザイン』

7

ジャンパースカート

*

着物地で作ると軽く
足さばきがいいと
好評です
一枚の着物から
プレーンな
ジャンパースカートと
ジャケットが取れます

着物から服を仕立てます

梵~ほん~

その足跡を
音でてる子